

生化学若い研究者の会「第62回 生命科学夏の学校」開催報告

岩村 悠真¹, 平岩 祥太郎²

(¹実行委員長・東北大学, ²事務局長・東京大学)

はじめに

本稿では、2022年の8月26日(金)～28日(日)に実施した「第62回 生命科学夏の学校」(以下、夏学)について報告します。夏学は、日本生化学会後援の「生化学若い研究者の会」が毎年夏に開催している日本最大級の若手研究交流会のことであり、講師講演により最新の学術知見を学ぶワークショップ、テーマに沿って議論を行うシンポジウム、有志の参加者による研究発表を通して、若手研究者の育成と人脈形成を目的としています。本年は東北大学片平さくらホール(宮城県仙台市)およびオンライン特設会場の2拠点を会場としたハイブリッド方式で開催されました。

第62回 夏学コンセプト「あなたを、多角的に見つめる」

夏学は、多様な生命科学研究を行う若手研究者が集結し、3日間にわたる濃密な研究交流が展開されることが強みです。この過程を通して、普段の研究活動では関わりのない研究者同士が出会い、思わぬ研究発展に繋がることが期待できます。しかし、一昨年・昨年はオンラインのみでの開催となり、十分な交流の場を提供できませんでした。そこで、今年は特に研究交流に力を入れるために本コンセプトを定め、参加方法に制限をかけず現地・オンラインのハイブリッド開催を実施しました。本方式での開催においては、日本生化学会をはじめとして多くの協力者よりご助力・ご助言をいただくことで実現することができました。

その結果、日本全国に加え海外で活躍している研究者の参加が認められ、本年のねらいである現地・オンラインの垣根を越えた交流が展開されました。また、例年は参加者による研究発表をポスター形式で行っていましたが、オンラインからも発表しやすい口頭形式に変更しました。38名もの発表者から研究発表が行われ、多数の聴講者の方々から「普段絶対聴きに行かないような研究を知ることができた」という声をいただき、コンセプト実現に貢献できたと考えております。参加者投票の結果、4名を優秀発表者として表彰しました(写真1)。

地理と世代を超えハイブリッドな議論が展開されたワークショップ・研究交流会

各分野におけるトップランナーから最先端の学術知見を学ぶワークショップでは、古川善博先生(東北大)、齋藤博



写真1 研究フラッシュトーク

2日にわたり希望者38名(現地27名、オンライン11名)から3分間の研究口頭発表が行われました。優秀発表者として、左から落合佳樹さん(OIST)、鎌田真慈さん(東京大)、橋本蒼太さん(大阪医科薬科大)、橋本陽太さん(東工大)には賞状と記念品を贈呈しました。

英先生(京都大)、廣明秀一先生(名古屋大)、中西真先生(東京大)、谷内江望先生(The Univ. of British Columbia)、津川裕司先生(東京農工大)にご登壇していただきました。研究成果の面白さもさることながら、失敗談やキャリア変遷についてもお話していただき、会場から笑いが起こる一幕も見られました。そのおかげか予定されていた質疑応答の時間では収まらず、休憩時間中には先生に質問しようとする参加者の列が見られ、絶え間ない議論が展開されました。また、ハイブリッド開催であったことを活用し、海外でご活躍されている先生をご招待できたことは、運営の今後の活動範囲を広げる良い前例となったと考えています。

講演や口頭発表後に行われた研究交流会では、当日の講演について改めて議論したり、研究遂行上の悩みを共有したりすることで参加者間の交流を深めていただきました。また、講師の先生方にも参加していただき、若手にとって非常に刺激的な時間になりました(写真2)。特筆すべき点として、研究交流会の時間以外にも参加者用の連絡網として使用していた「Slack®」を活用した交流が見られたことです。さらに若手-若手間に加え、若手-先生間、先生-先生間でのフラットなやり取りも見られ、地理および世代を問わないハイブリッドな研究交流が展開されました。これは夏学という場が人脈形成においてさらなる可能性を秘めていることを示唆しています。



写真2 研究交流会

参加者間の交流を促進する目的で、1日目夜、2日目夜に学年、分野、ランダム・トピックごとにグループで交流できる場を設けました。写真はグループ19の様子であり、持ち寄ったPCを活用して廣明先生と2名の学生が議論に花を咲かせました。

研究者として生きる先輩から『研究哲学』を学んだシンポジウム

近年、博士課程に在籍する学生数や日本人著者論文の被引用数が減少する等、国内の研究力低下が大きな課題となっています。この要因の一つとして、研究者が非常に険しい環境を生き抜かなければならないことがあります。そこで、若手研究者がこの荒波に負けないよう、研究に対する確固たる考え方や態度、つまり研究哲学を確立することをテーマとしたシンポジウムを実施いたしました。また講師として、杉村薫先生（東京大学）、西田基宏先生（京都大）、深津武馬先生（産総研）にご講演いただきました。

第1部では講師の先生方から研究キャリアとその根幹にある研究哲学について語っていただきました。第2部ではパネルディスカッションを行い、参加者からの研究者としてどうあるべきか？という問いに通じる率直な質問に答えていただきました（写真3）。最後に第3部では、第1・第2部を聴講したことで自身に浮かび上がってきた研究観について互いに共有し合いました。これらの議論を経て、筆者らは同僚やコミュニティの中で切磋琢磨しあえる関係性を築いていくことが、革新的な研究成果を創出するためにも、研究者としてよく生きるためにも重要であると再認識しました。



写真3 シンポジウム

先生-若手間の忌憚のない意見交換の場を設けるため、パネルディスカッションを実施しました。パネラー（手前から杉村先生、西田先生、深津先生）が一列に並ぶ様子は壮観でした。

おわりに

今年度の夏学は総勢150名（現地96名、オンライン54名）の若手研究者が同じ時を共にし、交流を深めました（写真4）。以上のような活動により生化学若い研究者の会は、若手から生命科学研究の振興に貢献しています。夏学の他にも、全国でセミナーを開催する「支部会」や羊土社『実験医学』誌にて若手の意見を伝える「キュベット委員会」活動も行っています。これらにより「研究者ネットワークの拡充・次世代人材の育成」を目指しています。来年度の第63回 生命科学夏の学校は、第95回日本生化学会大会シンポジウム1S01a「若手研究者を繋ぐコミュニティの在り方」で告知させていただいたとおり、「持ち物、好奇心～運命を変える出会いが待っている～」というコンセプトのもと開催予定ですので、ご興味のある方はご協力およびご参加していただけると幸いです。

最後に、本年の夏学開催にあたり多大の支援を賜りました日本生化学会をはじめとする法人・企業・団体の皆様、またお忙しい時期に講演を承諾していただきました講師の先生方、そして1年間準備に携わっていただいたスタッフの皆様に感謝申し上げます。



写真4 集合写真

現地参加者とオンライン参加者双方を1枚の画角に収めるため室内を撮影場所としました。会期を通して現地会場はマスク着用、消毒、移動管理を実施し、徹底的に感染対策を行ったことで無事にクラスターを発生させることなく終えられました。

生化学若い研究者の会・第62回 生命科学夏の学校について：
<https://www.seikawakate.org/summer-school/>